

ナラティブ・アプローチを取り入れた看護教育実践の効果

佐藤 真由美

目次

1. はじめに
2. 研究目的
3. 研究方法
4. 結果
5. 考察
6. おわりに
7. 文献

1. はじめに

現代の若者である学生たちの特徴は、「三無主義（無気力、無関心、無責任）」であるという文章を私が目にしてから10年近くの月日が経とうとしている。現代の若者である学生の特徴の「三無主義（無気力、無関心、無責任）」は、さらに時代・社会の影響を受け、希薄な人間関係、乏しい生活体験、基礎学力の低下、自己中心的で人間的に未成熟であること、倫理観のない態度、低い道徳性と負のスパイラルを形成しているように思う。一般にいわれているこれら現代の若者の特徴は看護師を志す学生にも当てはまる。人の気持ちに寄り添い、考え、理解し、人の生活の世話をする看護師は、より人間的に成熟し、倫理感、道徳心を持っていることが望まれるが難しい状況である。

私は、看護基礎教育に携わり、このような現代の若者である学生たちと深くかかわるようになった。授業のなかで、「三無主義（無気力、無関心、無責任）」と言われる現代の若者である学生たちの「臨床の話をする目目がキラキラ輝き始める」「臨床の話をする背筋が伸び身を乗り出すような姿勢になる」という反応を感じてきた。臨床の話をする学生が変化！それはどのような事を意味しているのか。教員が臨床経験を語ることは、ナラティブを語ることである。ナラティブとは、「思考、意図、できごとの解釈、行動とアウトカムの時系列的記述を含む患者ケア事例の詳細な記述」と定義されている。¹⁾つまり、ナラティブ・アプローチは看護教員の臨床経験を語ることである。臨床経験は日々の看護実践のなかでの単なる経験の積み重ねではない。日々真剣に患者に向き合い、看護を実践したなかで出会った事象、嬉しかった場面、感動した場面、今だに解決できていない場面、失敗した場面、考えさせられた場面である。大池らは、看護教員の96%が臨床経験を語る重要性を認識しており、臨床経験を語る理由は、「臨床の場をイメージできる」「学習の動機付けに役立つ」「看護現象の理解につながる」「看護学生の情意領域（感情）の学習につながる」「看護への意欲を高めることができる」と学習への影響を認識している。²⁾臨床の話をする目目が確かに学生の反応が変化することから、ナラティブ・アプローチは、看護基礎教育の授業において、学生にとって看護への興味・関心が高められ、学習の動機

付けになるのではないかと考える。成人看護援助論Ⅰの授業でナラティブ・アプローチを取り入れ、学生の学習姿勢の変化、看護への思いの向上を確認し、結果を考察していく。

2. 研究目的

現代の若者である看護学生へ、基礎看護教育（授業）でナラティブ・アプローチを取り入れ、ナラティブ・アプローチの効果と必要性を把握する。学生たちが看護の魅力を感じ、学習意欲向上を目指した授業の取り組みについて検討する。

3. 研究方法

調査対象は、H短期大学看護学科1期生65名（男子10名、女子55名）、調査期間は平成22年4月～7月、調査は、成人看護援助論Ⅰでの授業評価を使用した質問紙法によるアンケート調査である。成人看護援助論Ⅰの授業で、ナラティブを意識的に取り入れた授業9回分のアンケートを対象とした。成人看護援助論Ⅰの最初の授業で調査目的、倫理的配慮を説明し、毎回の授業の最後に授業評価・アンケート調査法を配布し、記入後回収する集合調査法をとった。

倫理的配慮としては、調査の実施に際し八戸大学・短期大学研究倫理委員会の審査を受けた。授業評価・アンケートは無記名で回答は自由意思である。回収した授業評価・アンケート用紙は機械的に連番を打ってコンピューターにより集計・解析処理をするため匿名性は保持される。結果は研究の目的以外に使用しない。

授業評価は、『授業過程評価スケール —看護学講義用—』³⁾を使用し、自由に意見を記載できるスペースを数行設けた。『授業過程評価スケール —看護学講義用—』は、学生と教員の相互作用である講義における授業過程（以下、講義過程）そのものに焦点をあて、学生が評価者となって講義過程の質を評価し、その結果を教員が解釈し、次の講義過程の改善に用いるという目的をもつ測定用具である。³⁾『授業過程評価スケール —看護学講義用—』は、7下位尺度38項目から構成される。この『授業過程評価スケール —看護学講義用—』の評価項目のなかで教員の臨床経験を話すこと、つまり、ナラティブ・アプローチは、下位尺度Ⅳ【具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度】5項目のなかの4項目、下位尺度Ⅴ【内容の質と独自性】の4項目に当たると考える。これらの項目の集計は、Microsoft Office Excelを使用し単純集計し、項目ごとに平均値を求めた。

4. 結果

<u>下位尺度Ⅳ【具体と抽象の連関と教員意見の織り込みの程度】</u>	平均点
1. 具体例・事例・経験談などで抽象的な内容が具体的に分かった	4.52
2. 難しいテーマや内容については、事例を示したり、具体的な説明があった	4.51
3. 教員自身の意見や考えを適度に示していた	4.55
4. 1つの考え方として教員自身の意見を示していた	4.52

下位尺度Ⅴ【内容の質と独自性】	
1. 講義の内容は表面的なものではなく心に響くものであった	4.48
2. 新鮮さを感じる内容だった	4.49
3. 豊富な内容を含んだ講義であった	4.53
4. その教員にしかできない講義であった	4.49

この授業評価アンケートの結果から、教員が意識してナラティブを取り入れた授業では、『授業過程評価スケール—看護学講義用—』での下位尺度Ⅳの4項目で平均が4.5以上、下位尺度Ⅴの4項目で平均が4.4以上であったことから、教員のナラティブが学生たちにだいたい伝わっていることがわかる。自由に意見を記載できるように設けたスペースへの意見は、主に大きく6つのカテゴリーに分類された。

自由意見の分類

	カテゴリー	記載された内容
1.	授業自体に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・板書が読みにくい ・書くことが多くて大変だった ・分かりやすかった
2.	教員のナラティブをもっと聞きたいという意見	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の体験したことをもっとききたい ・先生の体験談が聞けて参考になる ・もっと事例や経験談がききたい ・事例が面白いので増やしてほしい
3.	教員のナラティブに関して学生の考えを聞き意見交換をしたことからの意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ずっと先生の話ではなくて質問を考えることがあって楽しい ・意見をきちんと聞いてもらえて授業をしている感じがした ・考えれば考えるほど難しいが楽しかった ・他の人の意見が聞けてよかった
4.	学習意欲の向上につながると判断できる意見	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強しようという気になれた ・自己学習頑張る ・分かることが面白かった
5.	看護への思いの向上と判断できる意見	<ul style="list-style-type: none"> ・患者さんの気持ちを考えていきたい ・自分もそのような看護ができるようになりたい ・その人の問題だけを見るのではなく生活背景をみてどうしたら改善できるかを考えなければならないということがわかった
6.	自分自身の振り返りをしていると判断できる意見	<ul style="list-style-type: none"> ・このままじゃいけないと思った ・自分の行動について考え直したい ・もっと看護学生としてやることはやらなきゃと思った ・とても心に響いた授業だった。口だけじゃなく行動できるように心掛けたい

5. 考察

ナラティブ・アプローチを取り入れた授業の学生の反応から、ナラティブ・アプローチは、学生が看護への思いを高め、学習意欲を向上するための効果があると考えられる。看護教員が語るナラティブは、実際の複雑な臨床の場面である。ひとりひとりの患者の異なった生活背景や価値観、家族との関係性、病状、状況は、テキストに記載された「個別性」という言葉だけでは簡単に伝えることができない内容である。そこから実際の生きた看護実践が学生たちに伝わっていく。実際の看護場面がイメージできることで看護実践場面から、看護師の行動や考え、患者の状況や思いを感じることができる。イメージできないことから興味をもって取り組むことができない状況から、臨床の話をもっと聞きたい、教員の経験をもっと聞きたいと看護に興味を持つようになる。学生は看護教員が熱く語るナラティブを通して、自分だったらどうするだろうか、先生はなぜそのような関わりをしたのだろうか、他の学生たちだったらどうするだろうかと思いを働かせる。そこで看護教員の熱く語るナラティブについて学生たちと意見を交わし合うことは、学生もひとりの看護者として患者と真剣に向きあう疑似体験になるのではないかと考える。その過程で、学生の意見が尊重されることは、学生自身が尊重され、大切にされたという思いにつながっていく。学生たちが自分自身が尊重され大切にされたと感じる体験と、学生自身の意見が看護に反映されたという体験が学習意欲の向上につながっていくのではないかと考える。さらには、看護教員の熱く語るナラティブを通して、看護者としての責任や態度、役割、求められる能力を目の当たりにし、学生自身の日常を振り返る姿勢にもつながっていくと考えられる。

6. おわりに

ナラティブ・アプローチを看護基礎教育の授業に取り入れることで、学生たちの看護への思いの向上、学習意欲の向上につながり効果的であるということがわかった。しかし、その効果が一時的なもので終わっているような傾向が強い。今後は、ナラティブ・アプローチが一時的な看護への思いの向上、一時的な学習意欲の向上で留まらないような取り組みも考えていきたい。

現代の若者である学生たちの思考に働きかけ、心に働きかけることができる授業を目指し、自分自身の臨床経験をもう一度丁寧に振り返り、語るナラティブを吟味し、授業に取り入れていきたい。

7. 文献

- 1) 川島みどり：看護を語ることの意味“ナラティブに生きて” 看護の科学者 9 2009
- 2) 大池美也子ほか：看護教員の臨床経験を基盤としたナラティブ・プロダクトによる教育方法の展開 課題番号17592207 平成17年～平成19年度 科学研究費補助金（基礎研究（C））5-17
- 3) 舟島なをみ、杉森みどり：看護学教育評価論 文光堂 29-31 2007
- 4) 佐藤みつ子、宇佐美千恵子、青木康子：看護教育における授業設計第4版 医学書院 2009
- 5) 佐藤紀子：看護師の臨床の『知』 看護生涯発達学の視点から 医学書院 2009
- 6) 小野晴子、住野好久：A短期大学における成人看護学Bの授業評価に関する研究 単元「心臓手術を受ける患者の看護」を展開して 新見公立短期大学紀要29（2）7-12 2009